

みんなの健康ラジオ

『難聴をあきらめないで、補聴器を使って
聞こえる楽しい人生を』

(2025年6月19日放送)

横浜市耳鼻咽喉科医会

けいゆう病院耳鼻咽喉科

山田浩之

難聴を放っておくとどうなる？

難聴の典型的な症状

- ✓ 聞き間違い、聞き返しが多くなった
- ✓ 音は聞こえるが何を言っているのか内容がわからない
- ✓ テレビの音が大きいと家族から嫌な顔をされる
- ✓ 自転車や自動車が近づいてくる音に気が付かない

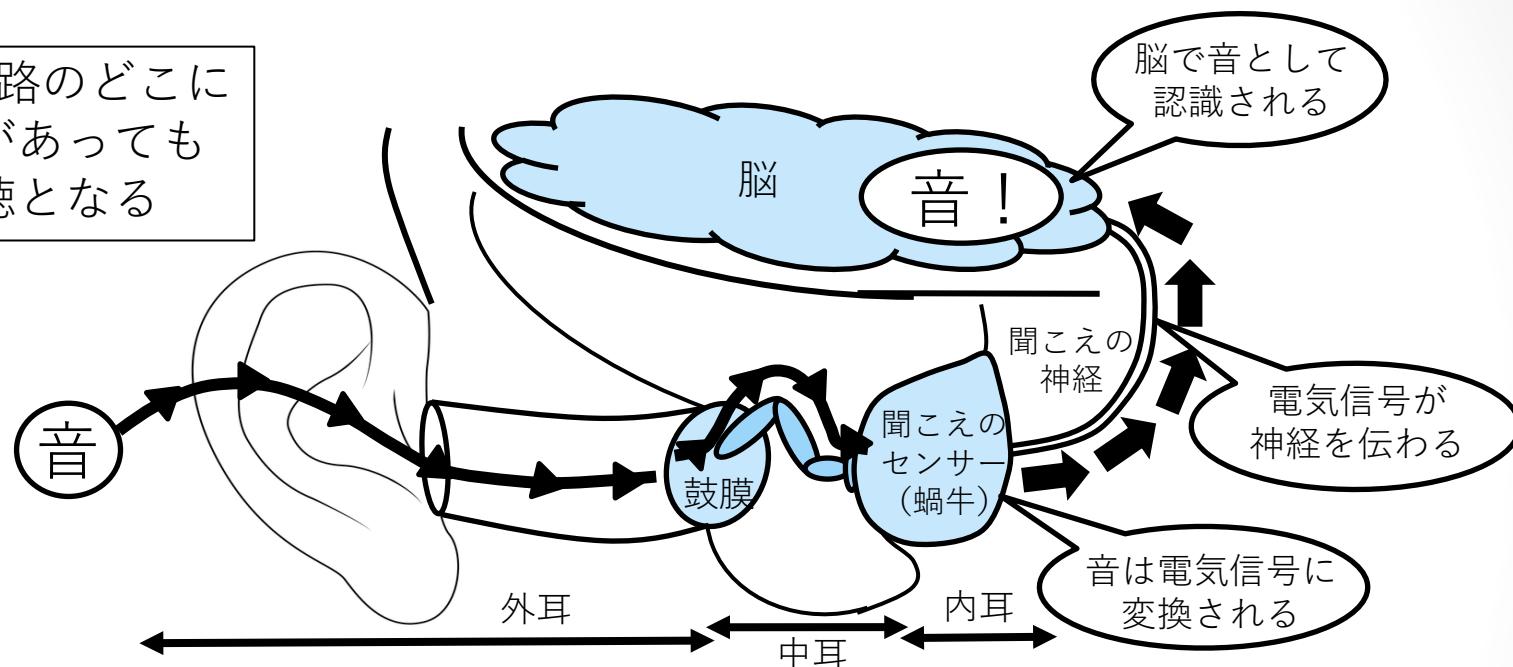
難聴を放置しておくとうどうなる？

- ✓ 危険を察知する能力が低下する
 - ・ 危険知らせる周囲の音や声が聞こえない
- ✓ 家族や友人とのコミュニケーションがうまくいかなくなる
 - ・ 声をかけられても聞こえないため、返事をしない、話を聞かないと思われる
 - ・ 聞き返すことがおっくうになり、聞こえたふりをしてしまい、その結果理解できない
- ✓ 自分に自信がなくなる
 - ・ 他人が聞こえている会話が自分にだけ聞こえないと考える
- ✓ 社会的に孤立し、うつ状態に陥る
 - ・ 会話に入れないとグループや会合などに入れないため、孤立してしまう
 - ・ 孤立すると楽しみや刺激、意欲が減少し、うつ状態に陥ることもある
- ✓ 認知症発症のリスクが大きくなる

聞こえの仕組みと加齢性難聴

耳の仕事は脳に音を届けることで、実際には**脳で音を聞いている**

この経路のどこに異常があっても難聴となる

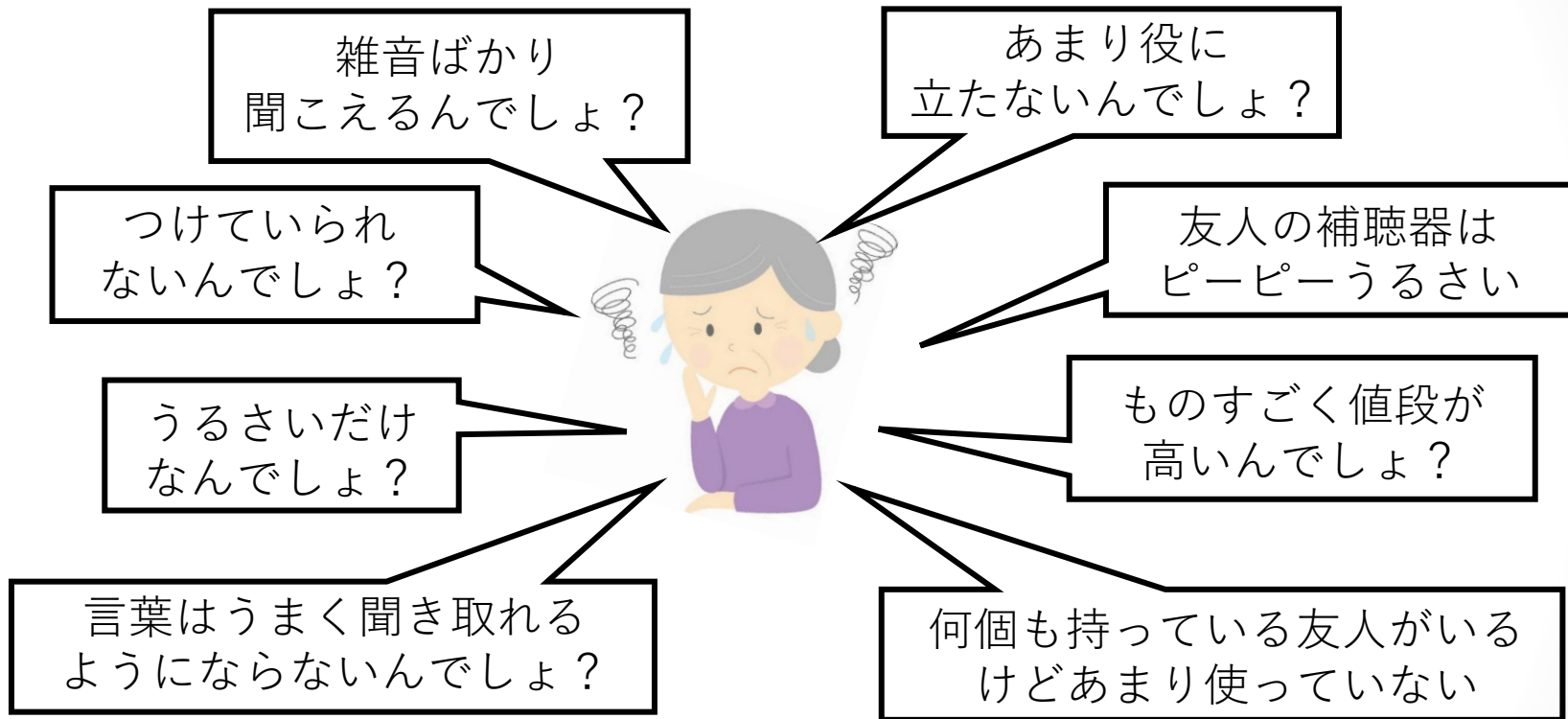


加齢性難聴は主に**内耳（蝸牛）の老化現象**が原因。音を感知したり増幅したりする機能が障害される。その他にも聞こえの神経の障害や脳の認知機能の低下も影響し、様々な原因が組み合わさって発生する。

内耳の老化は40歳代から始まり、高い音から聴力が低下するが、40-50歳代では難聴に気が付かない。**60-70歳代になると会話に必要な高さの音まで聴力が低下するため、難聴を自覚するようになる。**治療法はないため、難聴が進行し、日常生活に支障をきたすようになれば補聴器の出番となる。

補聴器は役に立たない？

補聴器の一般的なイメージ＝悪評？



実際に補聴器の音がうるさすぎて、使い続けられなかった人や、補聴器を使っても効果が実感できず、使わなくなった人は多く、難聴をあきらめてしまい、不自由な生活を送っている。

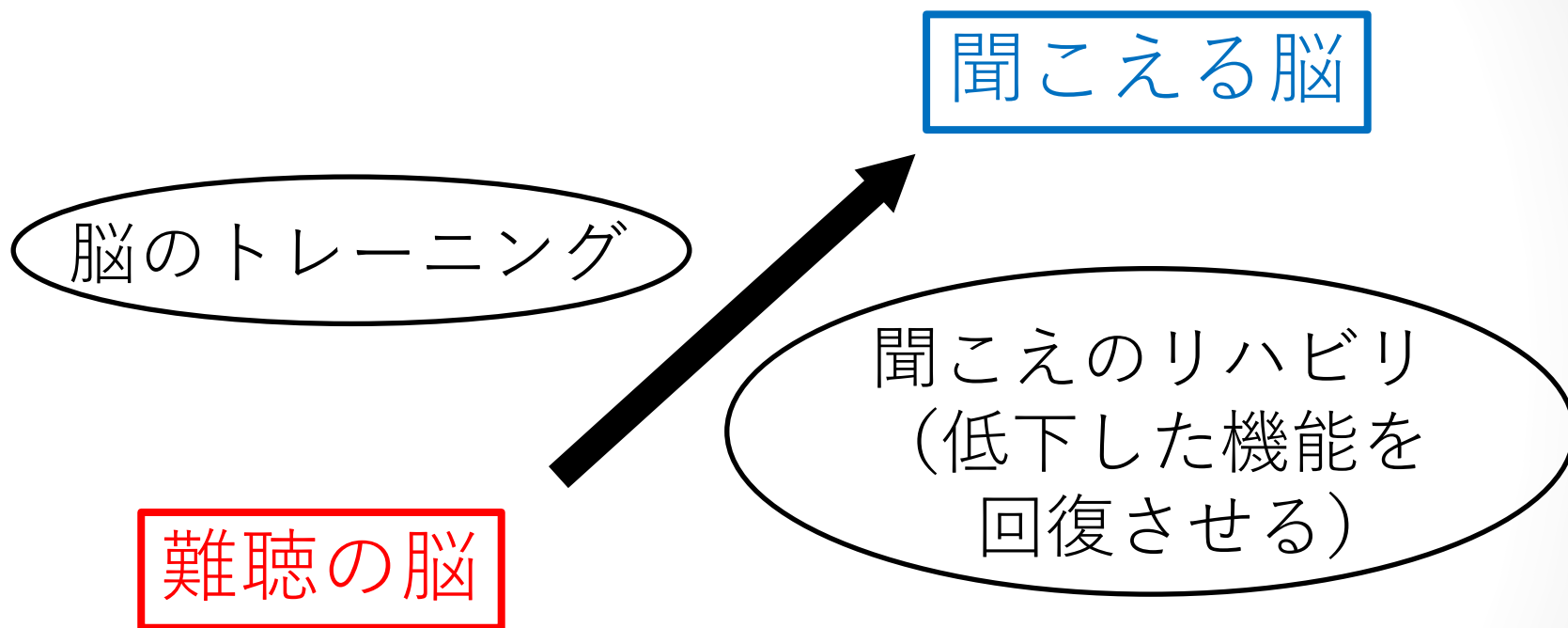
どうして補聴器はうるさい？

- ✓ 難聴の人は聞こえがよい人と比べて、**脳**に届く音（電気信号）が少なくなっている
- ✓ 脳に届く音が少ない状態が続くと、脳は音の処理の仕方を忘れてしまい、音に慣れていない、「**難聴の脳**」になってしまう
- ✓ 補聴器をすると脳に届く音（電気信号）が急に増えてしまう
- ✓ 「**難聴の脳**」は音に慣れていないため、**うるさい**と感じてしまう
- ✓ 自分の聴力にしっかりと合わせて調整した補聴器にもかかわらず、日常生活に支障がでるほど**うるさく不快に感じてしまう**。

どうして補聴器は聞こえない？

- ✓ 「**難聴の脳**」は音に慣れていないので、ある程度しっかりと音が入った補聴器だと、はじめは誰もが**うるさくて不快に感じてしまう**
- ✓ 補聴器を販売する際に、なるべく**不快に感じさせない**ようにするため、補聴器の音量を下げた状態の調整で使ってもらうことがある
- ✓ その結果うるさは軽減し、補聴器をつけた状態で生活できるが、音量を下げてしまっているため、満足に聞こえない
- ✓ **無いよりはマシ**であるが、あまり役に立たない補聴器となることも

どうすれば補聴器を使えるようになる？



医療従事者にしかできないリハビリテーション